

雨月

禅竹作

前

ワキ 西行法師

シテ 翁

ツレ 姫

後

シテ 住吉明神

地は 摂津

季は 八月

心を誘ふ雲水の。く。ゆくへや何処なるらん。

詞

「是は嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。我宿願の子細あるにより。唯今住吉の明神に参詣仕り候。

道行

「住み馴れし。嵯峨野の奥を立ちいで。く。西より西の秋の空。月をゆくへのしるべにて。難波の御津の浦づたひ。入りぬる磯を過ぎ行けば。早住の江に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早住吉に着きて候。我此所に来りこゝかしこをさすらひ歩き候ふ程に。早日の暮れて候。又あれを見れば釣殿の辺と思しくて。火の光の見えて候ふ程に。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候。

シテ

「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の霜。それさへあるに秋の空。余りに堪へぬ半の月。あらおもしろのをりからやな。

ワキ詞

「如何に此屋の内へ案内申し候。

シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ「行き暮れたる修行者にて候。一夜の宿を御借し候へ。

シテ「余りに見苦しき柴の庵にて候ふ程に。御宿は叶ひ候ふまじ。今少しさきへ御通り候へ。

ツレ「なふくは是は世を捨人。痛はしければ入らせ給へ。

二人「去りながら秋にもなれば夫婦の者。月をも思ひ雨をも待つ。心々に葺き葺かで。住める軒端の草の

庵。何処によりてとゞまり給ふべき。

ワキ詞「さては雨月の二つを争ふ心なるべし。月は何れぞ雨は如何に。

ツレ「姥はもとより月に愛で。板間も惜しと軒を葺かず。

シテ「祖父は秋の村時雨。木の葉を誘ふ嵐までも。音づれよとて軒端葺く。

ツレ「かしこは月影。

シテ「こゝは村雨。

ツレ「定めなき身の住居までも。

シテ「賤が軒端を葺きぞわづらふ。賤が軒端を葺きぞわづらふ。

詞「面白やすなはち歌の下の句なり。此上の句を継がせ給はゞ。御宿は惜しみ申すまじ。

ワキ「もとより我も和歌の心。其理を思ひ出づる。月は洩れ雨は溜れととにかくに。

シテ「賤が軒端を葺きぞわづらふ。

二人「月は漏れ雨は溜れととにかくに。賤が軒端を葺きぞわづらふ。

シテ「おもしろの言の葉や。

地「実に理も深き夜の。月をも思ひ雨をさへ。厭はぬ人ならば。こなたへ入らせ給へや。折しも秋なかば。く。三五夜中の新月の。二千里の外までも。

心知らるゝ秋の空。雨は又瀟湘の。夜の哀れぞ思

はるゝ。

ツレ詞 「なふ村雨の聞え候。

シテ詞 「実に村雨の聞ゆるぞや。 遠里小野の嵐やらん。

ツレ 「よく／＼聞けば時雨ならで。 更け行くまゝに秋風の。
の。

シテ 「軒端の松に。

ツレ 「吹き来るぞや。

地 「雨にてはなかりけり。 小夜の嵐の吹き落ちて。 な

かく／＼空は住吉の。 所からなる月をも見。 雨をも
聞けと吹く。 閨の軒端の松の風。 こゝは住吉の。
岸打つ波も程近し。 仮寐の夢も如何ならん。 よし
とても旅枕。 さらでも夢はよもあらじ。 いざ／＼
砧打たうよ。 浮世の業を賤の女は。 風寒しとて衣
打つ。 身の為めはさもあらで。 秋の恨の小夜衣。
月見がてらに打たうよ。

シテ 「時雨せぬ夜も時雨する。

地「木の葉の雨の音信に。老の涙もいと深き。心を染めて色々の。木の葉衣の袖の上。露をも宿す月影に。重ねて落つるもみぢ葉の。色にも交じる塵ひぢの。積る木の葉をかき集め。雨の名残と思はん。

シテ詞

「はや夜も更けたり旅人も御休み候へ。こゝはもとより所から。年も津守の小尉なれば我も。

地

「老衰の眠ふかき。夢に帰るいにしへを。松が根枕して。共にいざやまどろまん。(中人)

後ジテ

「あら面白の詠吟やな。陰陽二つの道を守る。其句を分つて五体とす。木火土金水なり。上下はすなはち天地人の三才は。是れ詠吟なるべし。我をば誰とか思ふ。忝なくも西の海。青木が原の波間より。

地「あらはれ出でし住吉の。

シテ

「神託正に疑はざれ。そもく此神の。因位を尋ね奉るに。昔は都卒の内院にして。高貴徳王菩薩と

号し。今は又玉垣の内の国に跡を垂れ。和歌を守りて住の江や。松林のもとに住んで。久しく風霜を送る。こゝに和歌の人稀なる処に。西行法師歩を運び給ひ。心を述ぶる和歌の友とて。神明納受垂れ給ふ。是によつて神慮の程を知らしめんと。宜禰が頭に乗りうつる。謹上。

地「再拝。(真の序の舞)

地「有難の影向や。く。返す心も住吉の。岸うつ波

も松風も。颯々の鈴の声。ていとうの鼓の音。和歌の詠吟舞の袂も。同じく心言葉に顕はるゝ。其風等しかりけり。是までなりや今は早。疑はで神託を。仰ぐべしと木綿四手の。神は上らせ給ひければ。本の宮人となりて。本宅に帰りけりや。本の方に帰りけり。